日本マレーシア学会「フォーラム」（http://jams92.org/forum.html）
2011 年 9 月 5 日公開

マレーシア人ジャーナリストがソマリアで死亡(2011.9.2)

平和ジャーナリスト Noramfaizul 氏の死を悼む

荒川朋子

2011 年 9 月 4 日付けの BERNAMA 通信は、スバンにあるマレーシア空軍基地（RMAF）にて行われたナジブ首相の会見内容を伝えた。これは、ソマリアの平和構築に関する報道に携わっていた BERNAMA テレビ局のカメラマン Noramfaizul Mohd Nor 氏が、9 月 2 日（金）、首都モガディシオで、四輪車に同乗中、砲弾による巻き添え被害で命を落としたことを受けて行われたもので、Noramfaizul 氏（享年 39 歳）の職務への情熱と奉仕を称えるとともに、同様な危険地域で職務についているジャーナリストたちが士気の低下を招かないよう、激励したものである。あわせて、このような被害を多発させる要因となる武器の拡散という事態に対する警鐘がなされ、Noramfaizul 氏の家族に対する政府援助の用意があることについても述べられた。

ナジブ首相は、1990 年代の国防大臣時代に、マレーシア軍の PKO 派遣地域であったボスニア・ヘルツェゴビナへ随行しており、紛争地域の状況や平和維持ならびに平和構築の実務にも詳しい。マレーシアでは、現在 UNDP（日本はドナー国）により PKO センターの強化が行われているさなかでもあり、これまでプリンシパル・パワーとして PKO 政策を牽引してきたカナダが、介入の効果からやや引きぎみになってきたのに対し、マレーシアの国際貢献に対する意識は、これまで以上に高まりを見せている。マレーシアの PKO 政策は、その規模から注目されることがあまり多いとはいえないが、その内容については、独自のスタイルと一貫性がある。

愛すべき父を失った幼い二人の男の子とその妻の心中を思えば、国や宗教を超えて、誰しもが心の痛みを禁ぜずにはいられないだろう。残された家族と、紛争地域で働く「世界の良心たち」のこれからの平安を願わずにはいられない。■